

## 人との出会い

chance meeting

金沢大学医学部薬剤部教授

市村 藤 雄

金沢大学が新制大学として発足して50周年と言うことで記念行事が企画されている。4回生である私達薬学生は基礎的学科に多くの共通点を持つことから、医学生の方々と同じ教室で教養課程等の授業を受けることが多かった。やがては共に医療に関連する道を迎えるとの認識が教育の基本にあったからであろう。その中には現放射線科の高島教授や第三内科の松田教授の名もあった。

私達の時代は戦後民主主義教育発足の時代で、旧制の高校・大学の教育に一種の憧れを持ちながら学生生活を送っており、戦中・戦後の体験・経験を踏まえた学生時代を過ごしていた。旧制第四高校時代の教室を使うこともしばしばあったので、何時であったか、明治村に保存されている理学部の机に刻まれている同級生の名前を見つけ、この上なく懐かしい思いにかられたのを思い出す。専門課程移行時のコース変更も成績次第で自由で、医学部に移った友人もいた。

若干期間は短い但我々薬学生も医学部の仲間と共に解剖に関わったことがある。その時の人体解剖に接しての感謝に満ちた敬虔な気持ちと、一種の恐れな気持ちは未だに忘れられないし、この複雑で緻密な構造体が渾然一体として命を得て機能していたことに思いを馳せると、有機体への神秘的な驚きを禁じ得なかった。こうして文章を作りながら往時のことを思い起こすと、生命体に関する科学のここ30年の進歩は正に驚異的である。私は今改めてこの急速な進歩の中で様々なことを経験し、研究者としてもこの時代の流れの中に生きていることへの不思議さと有り難さを実感している。

現在、薬剤師にも、患者の人間性を尊重しつつ薬物治療の面で悩む患者の存在を正しく捕らえ、専門家の立場から服薬の意義と必要な事柄の説明を行なうことが求められている。私は生来虚弱な体質で、この医療機関の方々には大変助けられて今日に至っている。チーム医療に参加する時代になって、そのことを感謝しつつ、患者の一人としての気持ちを職員に伝えることも私の存在意義の一つと心得るようになった。

戦後の新制大学には教養部の設置が求められた。新しい時代に相応しく、知識を深めることにより自己を確立し、様々な事柄についても独立した存在として判断出来る力を培うために必要だとの考えから設置されたものと聞いてきた。当時の講義について振り返ると、後に高名になられた先生方の講義や、西田哲学の後をつぐ第四高校伝統の哲学科の教授の講義を聞いて心引き立つ思いをしたことが蘇ってくる。まだまだ若き学徒の気持ち

を高揚させるものが数多く残っていた。

今は亡き中村秀吉先生は、西田哲学の後継者ではないが、「総合科学としての哲学」を著した安藤教授と共に、その論理学の講義を私は大変気に入っていた。後年、偶然すぐ近くに住いを得たことから、子供達が年齢的に近かったこともあり、家族ぐるみのお付き合いに至り、大変に感銘深い幾つかの思い出が残っている。東大数学科から哲学に移られ、当時記号論理学の講義で有名であった中村教授は、千葉大学に移られて定年退官を目前に他界された。今だに、自分で解決の糸口もつかめない問題にぶつかるごとに、先生ならばどのように考えられるかと訊ねてみたい思いにかられるが、今はその術もない。やはり近くにお住まいであった久野 滋先生と中村秀吉先生のご一家が家庭音楽会と称して小生宅に集まった時の会話も楽しいものであった。中村先生のご夫人は今も国分寺市にお住いで、時折突然の訪問を受けて驚かされるが、本当に会話の楽しい方である。教養時代から引き続いて、偶然の機会から少なからぬ影響を受けた御夫妻であった。夫人と言え、私が入学当時薬学部長で、1950年代初めまで金沢にいらした鶴岡貞二先生とご夫人に教えられることが多かった。チャーチルのメンバーであった鶴岡先生からは油絵を見る楽しさを、鍋島家のお姫様であった夫人からはクラシックを聴く楽しさを教わった。当時はお宅でイギリス土産の蓄音機からでる懐かしいような歌声を響かせる声楽を聴くことが多かったが、この頃の私は自宅のリスニングルームで、殆どピアノ曲を聴いて過ごしている。学生時代以降様々な方々との出会いもあり、書物の上での先生も大勢数えられる。教養時代に学んだことを切っ掛けに、先人の残した様々な文化遺産に興味を持つことも多いが、そこから何かを得ることが出来ればそれは人生を豊にする。そのことから生きる喜びに連がって来ることもあるし、時には専門分野での研究・教育にも大きな影響を与えることを経験している。

このような出会いは、教養過程で人間学を学びえたお陰であると、今でも感謝している。忙しい中で、ゆったりした時間の流れに浸っていくことの大切さを時折思い起こすこともあるが、雑用の時間に追われて見失ってしまっている。この文章を書くに当たっても、今さらながら痛感した。

50周年記念に当たって、思いだすことを書きつづってみた。